武蔵野日曜聖書講筵　復活節

旅人キリスト
――ルカ伝第24章13～32節――

１９８４年４月22日
小池辰雄

神さまの旅　人生は旅　旅人にして牧人　十字架と復活　義と愛の叫び　十字架・復活・聖霊の三相一貫　ああ愚かにして心鈍き者よ　霊受説　天地一如の旅　キリストという旅人と一緒に歩く

【ルカ24・13～32】

13視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、14凡て有りし事どもを互に語りあう。15語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。16されど彼らの目遮えられて、イエスたるを認むること能わず。17イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』かれら悲しげなる状にて立ち止り、18その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓り居て、独り此の頃かしこに起こりし事どもを知らぬか』19イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業にも言にも能力ある預言者なりしに、20祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之を付し遂に十字架につけたり。21我らはイスラエルを贖うべき者は、この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日ははや三日めなるが、22なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝夙く墓に往きたるに、23屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。24我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』25イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。26キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』27かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。28遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、29強いて止めて言う『我らと共に留まれ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。30共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、31彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエ

ス見えずなり給う。32かれら互に言う『途(みち)にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』

●神さまの旅

復活節は、歴史的には何月何日かはっきりしたことは分からない。ヨーロッパの南の方の春の祭と一緒になってしまって、３月22日以後の――春分ですね――春分以後の満月の次の日曜日という計算になるわけです。誰が決めたんですかね。４月22日というのは非常に遅い復活節です。

私が内村先生の大手町の集会で最初に聴いた復活節は、１９２３年の４月１日で、今でも忘れられない復活節でした。その時に内村先生が、今、女の方が歌ってくださった

讃美歌496番「美わしの白百合」

をやはり女性だけに歌わせていた。それから私は内村先生にならって、そういうようにしているわけです。

今日は珍しい題を掲げて、「旅人キリスト」なんていうのは初めてです。もっとも、それはルカ伝24章に関係はしますけれども。イスラエルの民は旅人である。牧者がまた旅人である。

「緑の野に、憩いの水汀(みぎわ)に」

と言って、詩篇23篇にあるように。神さまの歴史は、創造から宇宙の完成、終末に至るまで、創世記から黙示録まで、これも旅ですよね、神さまの旅なんです。この「旅」という言葉は何かと思って、『大言海』をひっぱってみたら、あの履(は)く「足袋(たび)」からきているんだね。足袋を履いて歩くから「たび」になる。たびはだしで歩くわけだ。キリストは肉体の足の底をたびにして、たびをした。聖書には「旅をする」という言葉がない。聖書の「旅」というヘブライ語をみると、

「仮の宿りをする」

という字なんです。友だちが来たら一泊させてあげなさいという、一泊させてもらうのが旅人なんです。仮の宿りをする。だから、「宿れる者」なんて書いてあるでしょ。あの

「旅人また宿れる者」

という言い方は、要するに同じ内容を別な言葉で言っているだけの話です。ヘブル書にも出ているし、旧約にも出ている。お泊まりなさいという、「泊まり人」というわけだ。

「旅人を懇ろにあつかえ」

というのは、歩いて来た人を、お疲れさまということで、「宿してあげなさい」ということ。ドイツ語でも、「ガスト・フロイント」（客を厚遇する主人）という言葉もある。旅で泊めてやるところのお客さんを懇ろにあつかうことを「ガスト・フロイントリッヒ」という。

要するに、聖書の歴史、世界の歴史、これはみな神さまの旅である。神さまの旅を具体

的にやった人がこのキリストであるから、そこで「旅人キリスト」ということに今度はなった。旧約からして既にエホバの神として、キリストはそこにおられたわけです。

「我はアブラハムより前にありしなり」

と言う。みんな背後にキリストが歩いておられる。天界を歩いておられた。それから地上に来て、30年ばかり歩かれた。キリストの地上の旅の終点の大焦点は二つある。

「十字架と復活」

です。この十字架と復活は大変な焦点です。

お釈迦さんの世界も素晴らしいけれども、キリストの世界はもうひとつ凄いんです、キリストの復活体なんていうものは。「復活」という言葉が躓きになるよな、「復た活きた」なんて。これは、復た活きたではない、始めから活きているんだ。霊活している。霊で活きている。

●人生は旅

人生がまた旅である。世界の歴史がキリスト中心の旅である。召団讃美歌の第一番が

「わが道伴れわが情け」（１９７６・２・21作）

という歌です。不思議だね、あの道伴れの讃美歌を一番先につくったのも。我々クリスチャンはどこを独りで歩いていても、キリストは共にいてくださる。何人で歩こうとも、キリストが一緒でないとね。

「月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やや年も暮、春立る霞の空に、白川の関こえむと、そぞろ神の物につきてこころをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず。もも引の破をつづり、笠の緒付かへて、三里に灸するより、松嶋の月先心にかかりて、住る方は人に譲りて、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞ雛の家
面　八句を庵の柱に懸置。」

という、有名な奥の細道の最初の文句ですね。芭蕉はそのようにして本当に旅をして、日本中あれだけの所を歩いたんだから、もの凄いものだ。芭蕉の句は、本当にそこで全身を投じた句です。単なる即興の句ではない。だから、不滅の力をもっている。

「天地は万物の逆旅なり」

という言葉がある。そういった、

「月日はやはりお客さんで、年もまた旅人なり」

と言っている。時をまた旅人に例えて、擬人的に言っているわけです。だから、我々は時

と共に、また場所と共に動いている。本当に人間は、その姿は誰でもが旅人である。止まっていない。寝ていても、動けなくても、旅人です。その心の姿がみな天界に逆投影して映っている。人間の書いている歴史なんていうものはあてにならん。ところが、神さまがその霊眼をもって記(しる)しているところの影像は、これは心の奥まで見ている影像ですから、これだけが本当の歴史です。だから、神さまの歴史の中を本当に歩いているような旅人にならなくてはいかん。

そこでは、ごまかしがきかない。詩篇139篇のごとく。詩篇139篇は今度の「旧約抜粋」の中に載せます。「エン・クリスト」誌（第９号、１９８２年５月）のあの詩篇139篇の

「汝知り給う」

というあの文は大事ですよ。時々ひっぱりだして、私の手紙だと思って読んでください。私は自分で読んで、ラインを引っ張ったりしている。

「ああ、そうか」

と言ってね。それは神さまに示されて書いているから。自分で自分が教えられている。

●旅人にして牧人

旅人という言葉は私は非常に好きだ。牧人(まきびと)という言葉も好きだ。神さまは牧人である。キリストも牧人です。我々もまた旅人にして牧人にならなくてはいかん。人を、

「一緒にさぁ行きましょう」

と言って連れて行く。疲れていたら、手を引いてあげます。おぶってもあげます。そういうのが本当の牧人である旅人なんです。旅人と牧人が一つにならないと、本当の旅人でなくなる。

芭蕉は大自然と融合した境地に入る。一茶はまた人生の苦難、苦しみ、貧しさ、そういった人間苦を本当にわがものにして告白している。どっちも大事です。

『素朴と感傷の文学』

という論文がシラーにあるが、あの素朴と感傷の文学は、素朴が芭蕉で感傷は一茶だ。ゲーテとシラーみたいだ。どっちだっていい。けれども、要するに、自然と人間が――

『自然と人生』

というのが徳冨蘆花の本にある。あれは名文で私はよく昔は読んだものだ。若い人は知らなかったら、読みなさいよ――正に自然と人生が一つになっていればまちがいない。ゲーテが正にそのような詩人だった。

「神―自然―我」

ということ。その自然と人生が一つになっている境地から、今の文明はズレてしまっている。

アマゾン流域の大森林の供給している酸素は、地球の三分の一を供給しているそうだ。それが四割方伐られてしまったものだから、酸素の量が減ってしまって、天候の上でもい

ろいろおかしな現象になってくる。原子爆弾の爆発がそうだし。そんなことをして、何かこの頃はバカに寒いとか何とか言うけれども、寒さをもたらしているのは本当は人間なんだ。人間の間違った文明が間違った気候をもたらしている。創世記に

「人は自然を支配する」

ようなことをちょっと書いてあるが、あれはヘタすると間違う。勝手に支配したらいかん。支配ではないんだ。本当は自然と親しむ。ゲーテはあの言葉はあまり好きではなかった。ゲーテという人はちゃんと見るものを見ているから。

「自然を征服するなんていうのはとんでもない。山を征服するのもとんでもない。親しまなくてはいかん」

と言っている。日本の家屋は本当はいいんですよ、木材でね。だんだんこれがおかしなことになってきた。気候によっては、木材では困る寒い所もあるけれども。大体、風通しがいいんだ、木材は。窒息しない。自然と融合することが大事です。

人生は、我々は旅人であると同時に牧人（まきびと）として、人を道伴れにしていく。

「旅は道伴れ世は情け」

という。あれと同じです。

●十字架と復活

キリストの復活はもちろん十字架が前提です。私はイスラエルに行って、あのキリストの墓、ゴルゴタの下の洞窟みたいな所に――「石を転（まろ）ばす」と書いてあるが、まさに転ばすような石の溝みたいなものがあったけれども――あの中に私は入った時に全身が動けなくなるような気持になった。キリストがここで葬られた。しかし、キリストは

「三日目に自分は甦る。宮を建てる。活きた宮だぞ」

と。ちゃんと預言しておられたからね。それで、番兵のローマの兵隊が蜘蛛の子を散らすように逃げてしまった。キリストの霊生はもの凄い現実です。

これはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネに全部出てます。何といったって、この十字架のところと復活のところが最後のクライマックスですから。これはどの福音書にも力こぶをいれて書いてある。全く聖書は不思議な書だよな。弟子どもは怪しんだという。怪しまないのは、むしろ、驚いて一番それに触れたのはマグダラのマリヤなんだ。キリストから悪鬼を追い出されたマグダラのマリヤの名前が一番先に出ている。そして、白き衣を着た天使が現れて、

「こんな所にいませんよ。キリストは仰ったではないですか、ガリラヤに先立ちて行きたもうと」

と、マルコ伝には書いてある。

今日は十字架の金曜日ではありませんけれども、ちょっと、十字架のところに戻ってく

ださい。ルカ伝23章44節から、

「44**昼の十二時ごろ、日、光をうしない、**

太陽が一番光りのあるときに、光りを失ってしまった。

地のうえ遍く暗くなりて、三時に及び、45聖所の幕、真中より裂けたり。

これは大声で叫んだからですよ。マルコ伝15章37節に書いてあるように。

「37**イエス大声を出して息絶え給う。38聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり。**」（マルコ15・37～38）

と。神殿の至聖所の幕が裂けたというのは、旧約の宗教はこれでお終いということです。

46**イエス大声に呼ばわりて言いたもう『父よ、わが霊を御手にゆだぬ』斯く言いて息絶えたもう。**」（ルカ23・44～45）

マルコ伝の方では

「**大声を**」

と、マタイ伝の方も

「**大声に呼ばわりて**」

とだけ書いてある。大声の後で、

「**御手にゆだぬ**」

という言葉が出てきたので、この大声というのは霊言、異言なんです。この異言的な大声で旧約の宗教は、いわゆるドイツ語でいうと「アウフヘーベン」された。満たしてこれを棄ててしまう。

彼自身が牧人であると同時に、彼自身が羔となったわけです。犠牲の小羊となった。贖罪の犠牲です。罪を贖う。贖罪ができるのはキリストだけです。今度の「ルター」のところ（小池辰雄著作集第七巻『聖書の人ルター』）にも書いてあったでしょ。あのルターの劇的生涯をよく読んでください。

●義と愛の叫び

真言密教というのも異言的なものを持っている。空海が、やはり霊肉渾然たる世界なんです。しかも、それは現世においてその境地に達せよという。即身即仏です。空海はその境地に入った。そして最後に、自分が天界に、霊界に往く日と時刻まで示されて、その通りに逝ってしまった。仏教の超一級の坊さんたちは凄い。私たちはキリストのこの生命をいただいて、本当にその世界に入っていかなかったら、何がクリスチャンかということになるわけです。だから、私は、

「プロテスタントでも、カトリックでもありません。キリストの直弟子の次元でございます」

と言っている。けれども、

「プロテスタントでもカトリックでも何でも結構です。ただそこに本ものが来ていますか」

ということだけを問題にしている。

「教会だ、無教会だ」

なんて、しょっちゅう相対的なことを言ってたってしょうがない。無教会というのはパリサイで困ったものだな。気の毒になるね。なぜ、いつも自分を乗り越えて進んでいかないのか。自分を大事にしているから本当の前進ができない。私のこういう表現は論理ではないですからね。

キリストは、

「**わが神、わが神、なんぞ我を見捨て給いし**」

と叫んだ。これは本当に叫びです。

「あなたに全存在を信頼してきました」

と。神さまの義を貫いたんだ。すべて神さまに対して

「はい。はい」

と言って動いていた。

「はい」とは「拝」という字を書く。これは手が二つなんです。「拝」というのは両手を合わせる姿です。もともと宗教的な言葉なんだ。ところが、この頃の若い人たちは、少年少女ははっきり「はい」と言わない。これは何も彼らが悪いのではない。教育が悪い。親と先生方の教育が悪い。はっきりそのように育てていかないから。

「小池先生は明治生れだから、古いから仕方がない」

と、そうじゃないよ。古くて新しいんだ。

「**わが神、わが神、なんぞ我を捨て給いし**」

というのは「義」の叫びです。

「**彼らを赦せ**」

というのは愛の叫びなんです。

「私が贖罪の十字架にかかりました。どうぞ、これで彼らを赦してやってください」

と。「赦してやってください」というのはただ空の願いではないですよ。自分を十字架にかけての願いです。だから、キリストは黙っていらっしゃっても、この義と愛がちゃんと十字架の形でそこにあるわけです。縦の線は義である。横の線は愛である。これは十字架だ。

なにもケチをつけるわけではないけれども、北森君が

「神の痛みの神学」

なんて言って、これはドイツ語にも訳されてもてはやされている。それは、神さまに痛みの面もあるでしょう。けれども、神さまの愛が、いつまでも私たちに対する痛みだったら、どうするんですか。痛みから砕けにきて、十字架の砕けから神さまのもの凄い大肯定の愛

が展開しているんです。与える義が展開している。そのような烈々たるものでなくて、なにが福音かと言いたい。

私は、今度の『エン・クリスト』誌18号に書いたでしょ。

「今に劇的な叙事詩が20世紀の終りには世界を驚かすぞ」

「驚かすぞ」とは書かなかったけれども、

「出るぞ」

と。私は自分に大使命を課しているわけです。これを書かないでは死ぬわけにいかん。これだけの無限無量の福音に接して、証言しないではいられない。

イタリヤにダンテあり、ドイツにゲーテあり、日本に誰かなくては困るんだ。藤井先生は大きな詩をお書きになったけれども、残念ながら未完成だ。けれども、日本の詩壇で藤井先生の詩を知らないものな。私の詩は未完成でもいいですよ、未完成交響楽でも何でも。ただ、完成するまでは誰にも見せない。今から十五年かかる。

だから、本当は集会していられないんだ、本当のことを言うと。これに本当に打ち込むと、集会もしてられなくなる。けれども、集会はしますよね、已むを得ずして、しますけれども。

「已むを得ざるなり」

とパウロが言った。パウロの言った「已むを得ざるなり」は別な意味ですけれども。私ももちろんパウロの意味の「已むを得ざるなり」を持っていなかったら、集会なんかできませんよ。いい加減なことはできません。

「まぁ、仕方がないから、やっておきましょう」

なんてのはいかん。そうだったら、みんな逃げて行ってしまう。

●十字架・復活・聖霊の三相一貫

この十字架のあたりの聖書を読んでいたら、もう註解書も何もいらんですよ。皆さん、瞑想しながら、祈りながら、祈り入って読む。そうすると、文字の奥からグーッとくるから。もうそれが聖霊の世界だ。註解なんかいらない。パウロの、

「我キリストと共に十字架せられたり、もはや我生くるにあらず。キリストわがうちに在りて生きたもうなり」

という。プロテスタントが金科玉条にしているガラテヤ書2章20節は、

「キリストわがうちに在りて生きたもうなり」

とは何ですか。御霊のキリストじゃないですか。キリストの御霊じゃないですか。復活したキリストが与えてくださるこの聖霊じゃないですか。

だから、「十字架・復活・聖霊」の三相一貫です。復活節と聖霊降臨節は五十日離れていたって、本当はすぐ隣りなんです。こういう烈々たる生命を何をもって代えることができるか。お説教なんかしているのではないですよ、私は。

まぁ、至聖所の幕が切って落とされるなんて、凄いことだよな。

「癒えたり！」

と言えば、何キロ離れていたって、パッとその瞬間に治ってしまう。

「起きよ！」

と言えば、ラザロが起き上がってくる。大変なひとだよ…（異言）…。

そういうもの凄い現実なんだ、キリストというひとは。だから、キリストの中に自分を投げ入れるほかに何があるんですか。そうしたら、もの凄い変化を起こすから。何かおかしかったと思ったのが治ってしまったなんていうことになる。人間の側のいかなることでもない。全部、上からくる。

昨日は、私はゲーテ研究会で――一か月に原則的に一回やっているけれども――『ファウスト』のあるところを読んでいて、やっぱりゲーテは凄いなと思った。私は、いらっしゃる方々に言った。ドイツ文学の叢々たる方々ですけれども。

『ガイスト』という言葉を『精神』なんて訳したらダメです、これは霊なんだ。

聖書を読まなかったら、

読むだけではダメだけれども、

聖書を本当にくらわなかったらダメですよ。ルターの訳がなぜ凄いかというと、

ギリシア語やヘブライ語の奥の神の根源語にふれているからです」

と。そんなことを言うやつがいないんだ。どういうことだろうね。

キリストが甦った。「よみがえる」というのは

「よみからかえる」

という字だ。黄泉とか陰府とか書くけれども。陰府の世界から帰ってくる。

キリストは地獄の奥まで行って、それから三日目に甦ってきた。それは霊体を持っている。霊体をもって現れた。霊現したわけです。その時にはキリストは、戸が閉まっているのに入ってきたりする。キリストの霊体というのは不思議な霊体だから。ルカ伝の終りの方に書いてある。

「私は幽霊じゃないぞ。手を見ろ、足を見ろ。何か食べるものがあれば、食べてみせるぞ」

と。お魚があったので食べた。大変なことが書いてある。

「そんなものは宗教物語だ」

と言って、みんな笑うんだよな。もう我々の想像を絶する世界です。

キリストはいきなり天界に往けた霊体だよ。けれども、十字架にかかって贖罪の大業を果たして、本来の姿に返ったんです。霊体として霊現したわけです。霊体が霊現した。そして、

「聖霊を受けよ」

と。四つの福音書をお読みになると、私が今言っていることがみんな書いてありますから。

●ああ愚かにして心鈍き者よ

ルカ伝24章13節から、

13 **視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔たりたるエマオ**
という村に往きつつ、

エルサレムから西北方に道が通じている。

14 **凡て有りし事どもを互に語りあう。15 語りかつ論じあう程に、イエス自ら近**
づきて共に往き給う。

キリストの方から近づいて来て、一緒に歩いてくださる。

16 **されど彼らの目遮えられて、イエスたるを認むること能わず。**

イエスだということが分からないんだな。

17 **イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』**

もうキリストはその内容は知っている。けれども、そうやって聞いたんだ、何を一体しゃべっているのかと。

かれら悲しげなる状にて立ち止り、18 その一人なるクレオパと名づくるもの
答えて言う『なんじエルサレムに寓り居て、独り此の頃かしこに起こりし事
どもを知らぬか』

「お前さんはこれを知らないか」と。この「寓る」というのはさっき言った「旅人」と同じ種類の字です。「どうして、知らないんですか。とんでもない」と。

19 **イエス言い給う『如何なる事ぞ』**

「どんなことだね」と。

答えて言う『ナザレのイエスの事なり、

「あんたのことだよ」というんだ、本当は。

彼は神と凡ての民との前にて、業にも言にも能力ある預言者なりしに、

全くそのとおり。

20 **祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之を付し**

ローマの官憲に渡して、

遂に十字架につけたり。21 我らはイスラエルを贖うべき者は、この人なりと
望みいたり、

「贖うべき者」

なんて、何を言っているか。本当は贖ってしまったのに、「贖うべき者」なんて言っている。

この「贖う」という言葉の内容がまるで違う。イスラエルを他の支配から神の支配に戻して、イスラエルを世界王国にしようというのが、ユダヤ人の考えている「贖い」という意味です。

然のみならず、此の事の有りしより今日ははや三日めなるが、22なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝夙く墓に往きたるに、23屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。24我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』

そこに死んだイエスはいない。

25イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。26キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』

この「栄光に入る」というのは、苦難を受けて復活することです。十字架のあとで復活することになっているではないか。その預言が分からんかと、急にそんなことを言って、

27かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。

それからキリストは滔々と述べられたわけだ。アモス、ホゼア、イザヤ、エレミヤというような具合にね。

●霊受説

28遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、

そういったわけで、どんどん進んで行く。

29強いて止めて言う『我らと共に留まれ、

「まあ、ここでお泊まりください」と。

時夕に及びて、日も早や暮れんとす』

旅人の扱いをしようというわけだ。

乃ち留まらんとて入りたもう。30共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、31彼らの目開けてイエスなるを認む、

「パンをさく」という言葉は非常に意味が深重なんだ。あの五つのパンをさいて、五千人に与えたでしょ。これはナイフで切ったらダメなんだ。手でさく。我々もこれからナイフを使わないで、パンは手でさいて食べようかな。キリストも「これはわが体なり」仰った。最後の晩餐で、

「これは我が体なり。これは我が血なり」

と言って、葡萄酒を飲ませた。あれはギリギリのところだよ。

あのルターとツビングリーの最後の晩餐の争いのところもあそこに書いてありますから。私はあそこで

「霊受説」

というのを新しく立てた。ルター、カルビン、ツビングリー、それから小池という。

パンはパンです。けれども、パンを食べながら、同時にキリストの霊的な生命を受ける。それが本当の聖霊の世界です。それは、水が葡萄酒に変わるように、パンの中にキリストの生命が加わってくるんです。これが霊受説です。

同じパンを食べたってダメだよ、普通の食べ方をしたら、パンでもご飯でも。ご飯と水でもって――鰻がなかったら、鰻をシッカリ念頭において食べろと――そしたら、もうご飯と水だけで大丈夫だ。この霊的現実というのは凄いんですよ。ただ思われている世界ではないですよ、霊的現実というのは。

まぁ、私はこういうことが本当になんだか身についてきたのは、わりあいに最近のことだけれどもね。

「なぜ、小池先生はあんなに元気か。ゲルマニウムを飲んでいるからか」

なんて。そうじゃない。キリストというゲルマニウムを食べている。

目は見るでしょ、普通。目で捕まえたりしてますか。花を見れば花となりますか。

「ああ、花はきれいだな」

なんて、ただ外から見てたってダメなんだ。花を見て花となり、木を見て木となり、雲を見て雲となる。これは空想ではない。私のは実想なんだよ。よく「空想」という言葉があるけれども、私のは「実想」です。実想している。想って実がみのると書く。

「想う」という字はおもしろいんだ。木を目がとらえるんです。遠くにある木をながめていて、それで本当に心でながめる。それが「想う」という字だという。これはちゃんと漢字の解釈に書いてあった。だから、「想う」という字も具体的なんです。対象があるんだ、はっきり。

キリストは、

30 **共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、31 彼らの目開けてイエスなるを認む、**

と。「パンを取りて祝し」とあるでしょ。「祝し」はもちろん祈りのことです。日本人は大方みなすぐご飯をパッと食べるね、食前の祈りをしないで。犬猫みたいなんだ。言葉で祈らなくたっていいよ、黙って祈って結構だ。

「天を仰いで」とか「祝して」とか、必ず神さまとのつながりをそこにキリストは持つ。そして、裂いたら、前にそのキリストの裂く姿を見ていたから、

「あっ、これは」

と思った。開眼した。開眼したら、その瞬間にキリストはサッと見えなくなってしまった。

而してイエス見えずなり給う。

と。

「お前たちは、私が分かったら、もうそれでいいんだ」

と。それでいいのではないですよ、「分かった」というのは頭で分かったのではない。そのパンをさかれて、いただくときに――レンブラントのあそこの絵は素晴らしい。サッと光が射してキリストの姿がなくなっている絵がある。そして二人が驚いているんだ――キリストの霊が、御霊が彼らの中に飛び込んだ。目では電光石火に見えなくなった。けれども、うちに在ることに彼らはなった。

「ああ、キリストはやっぱり生きてらっしゃる」

と。いや、自分たちもこのように生かされたというわけだ。それで、弟子たちの所へ走って行った。

「実はこういうことがあった」

なんてなわけでね。そしたらまたキリストがやって来た。

●天地一如の旅

今日は「旅人」という主題なんだけれども、旅人、牧人（まきびと）ということは、なにも旅行することばっかり言っているのではない。毎日毎日がそのような神の歴史を旅しているわけです。神の歴史を旅して、そして、終末の新天新地の世界にむかって進んでいる。地上では大したことはない。天界に行っても、いよいよそうなんだ。地界も天界も天地一如の旅です。もう死を乗り越えているんです。

「私を受けとった者は死んでも死なないぞ」

というところに行ってしまっているわけです。ヒルティが

「死とは隣の部屋に入るようなものだ」

なんて言っている。ヒルティも実に、ちょっと椅子に腰掛けて、コーヒーを娘さんが取りに行っている間にスッと次の世界に行ってしまった。ゲーテもそうだよ。

「もっと光を」

と言って、カーテンを開けさせて、それで向こう側に行ってしまった。二人とも病気ではない。本当の往生だ。

まぁ、話はちょっとズレるけれども、癌になんか罹ってしまって――僕も罹るかなんか知らんけれども――大変だよな。しかし、Yさんは本当に死を乗り越えていたね、本当に大凱旋死をした。それを、点滴とか酸素吸入でただ延ばしているのはどうかと思うね、僕は。自然死がいい。

「もうそんなのはよしてください。私は神さまの命のまにまに向こう側にいきますから、余計なことはしないでください」

と。それが本当だよな。もう助からないことが分かっていながら、医者が妙なことをやるからね。あれは医者でなくて何者だか知らん。

自然の法則、霊法の世界。そういった意味では、我々は霊法的な、法人だよな――霊法

人――霊法の人です。もう、いわゆる

「キリスト教は、私の信仰は……」

とか何とか言って説明しているような世界ではない。

キリストは私たちの前を歩き、私たちの後から歩き、私たちの中に入って歩く。いいですか。先頭をきり、殿（しんがり）となり、また中に入って力となってくださる。これがキリストという旅人また牧人の私たちと一緒に歩いてくださる姿です。「共に」であると同時に「中（うち）に」である。

「インマヌエール」（神われらと共に）

ということと、

「ベヌエール」（我らの中に）

という言葉はないけれども、本当は「ベヌエール」と「インマヌエール」と両方です。旧約に「ベヌエール」という言葉がないのが残念だね。イザヤ書のどこかに、

「中に臨む」

というような言い方をしてたような気がするんだけれども、調べなくてはいかん。

どこをどう歩こうが、何をしていようが、とにかくキリストは一緒だということです。一緒も、ただ一緒じゃない。こっちが無的実存である。無的実存であるときの一緒が一番本当の一緒なんです。これは凄い一緒なんです。キリストは正に無的実存で、父と共だった。

「父の中に、父と共に」

というキリストは、寸分ズレのない一如の世界です。

「我を見し者は父を見しなり」

という。私たちは

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言えなくては。私はよく、

「小池を見るな」

と言ってますけれども、しかし、本当のうちなる小池は見てもらわなければ困る。小池ではないんだから。無者なんだ。キリストの無者なんだ。だから、私は時々、手紙にも書きますよ、

「キリストの無者」

と。名前を書かない。まぁ、楽でしょうがないね。楽で力が来てしょうがない。

人生のいかなる問題も、十字架で解決しないものはないし、聖霊でもって突破できないものはない。いいですか、本当に。そして、ガラリ変えられてください。カスが残っていたっていいよ、カスは。そんなものは心配しなくていいから。

「私ははっきり変わりました」

と言えなければダメなんです。

「まだ変わってないじゃないですか」

「あ、そうですか、そういうようにみえますか。結構です、私は変わりましたから」
と、それだけのことが言えなければダメです。

●キリストという旅人と一緒に歩く

まぁ、聖書ほど楽しい本はない。どんな小説も劇もかなわんですよ、この聖書というドラマには。大変なドラマだから。こんなに力を与える、光を与える、愛を与える、生命を与えるドラマはどこにあるか。ただ一巻の書、「ザ・ブック」なんだ。それはなぜかというと、神の霊の言、霊の行為が展開してやまないから。闇の世界を光の世界に変えつつあるところの驚くべきドラマだから。そういう烈々たるものです。愛といえばこれだけ凄い愛はないし、義といえばこれだけ凄い義はない。悲しみといえばこれだけ深刻な悲しみはないし、歓喜といえばこれだけ大きな喜びはない。

世界の為政者たちがもう一遍――いいよ、聖書でなくても――とにかく、絶対界との魂の交わりをして、

「さぁもう戦争はよそう。本当にイデオロギーを超えよう」

と。共産主義でも何主義でもいいよ。もうひとつ超えて、本当に偽りのない握手がなぜできないか。ここが人間が本当に罪びとだということ、どうにもならんということ。だから、十字架だということなんです。はっきりしているんだ、事実が。

キリストは再び十字架にかかりませんよ。今度は、「羔羊（こひつじ）の怒り」ですから。キリストの、

「**一度（ひとたび）その贖いを終えたまえり**」

というヘブル書のこの言葉を本当に受けとらないでいい加減なことをしてたら、今度は羔羊の怒りというのがくる。

今度は春夏秋の特別集会で黙示録をやります。黙示録は凄いからね。

「もうそれで私の集会はお終いで来年から一切集会をやめようかな」

なんて言いたくなる。それは冗談じゃないけれども、半分本当で、半分ウソだけれども。そして、私は皆さんの各召団の集会に時々出かけて行ってやることの方がいいかもしれない。出かけるところのない武蔵野はどうしてくれるかと（笑）。余計なことばっかり言っているね。まぁ、心配しないでいいですよ。来年は来年でやりますから。

これでもう、結論ならざる結論にきたでしょ。キリストという旅人と一緒に歩く。もうどこへ逃げて行ったってダメですよ。キリストは一緒に歩いているんだから。

「私はキリストと歩きたくなくなった」

と言っても、

「お前はこうやって私が支えているじゃないか。こんなに一緒に歩いているじゃないか。見えないか。パンをさくまで見えないか」

と。「パンをさくまで見えないか」なんて言われちゃうよ。

32かれら互に言う『途(みち)にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』

「我らの心は熱した」と書いてある。聞いてた時には熱したんだ、この二人は。なんだかしらないけれども、熱くなった。キリストというひとは預言者の総括のひとだから。それは熱くあるよ。

武蔵野のご連中も――なにも現象的に言うんじゃないけれども――もっと烈々たるものになってくださいよ。

「いや、静かだけれども、燃えてますよ」

と。それならそれでいいよ。また、人を本当に愛さなくては。

妬み・争い・恨み、この三つは一番わるい。妬んだり争ったり恨んだりするのは。そういう根性をもっていたら、それはもうキリストから棄てられる。こないだ私は書いたでしょ。

「今までどんなことがあっても、私は一人も恨みません。美わしきよき想い出だけを私は大事にしますよ」

と。本当だから。それでなかったら、私に聖霊なんか働かない。魂の世界はごまかしがききませんからね、どんな説明したってダメです。その姿ははっきりしているんです。

いいですね。そういうことで、楽しく勇ましく行きましょう。今日は

『天路歴程』

の話も言おうと思ったけれども、もうやめだ。バニヤン（ジョン・バニヤン　１６２８～１６８８）の『天路歴程』は有名な本で、聖書の次にたくさん読まれている本と言われているくらいです。これが正に旅人の本です。まぁ、よく書いたね、これは牢屋で書いたんだよ。バニヤンは牢屋に二度入れられて12年間、もう聖書を本当に身につけてしまった。そして、バニヤンはたくさん書いた。バニヤン全集というのは大部なもので、私は驚いた。大変な人だなと思った。学なんかないんだよ、この人は。聖書が一切の源泉となっている。『恩寵溢るるの記』というのと『天路歴程』が一番有名です。

では、今日の午前はそこまでとします。